

塾頭の塾頭松下元芳の系図について

— 福沢諭吉の一代前の塾頭で親友の久留米藩医 —

中山 茂春

緑風会 水戸病院

筑後久留米藩医松下元芳は、藩医松下養安(初次元芳)の長男として、天保二年(一八三一)に出生。天保十五年(一八四四)三月六日十四歳で日田の咸宜園に入塾し、広瀬淡窓の訓育を受け、詩才に優れた。嘉永七年(一八五四)五月七日に適塾に入塾している。安政三年(一八五六)に塾頭となり、その年の秋に帰藩している。

緒方洪庵が福岡藩の武谷祐之(椋亭)に宛てた手紙が残っている。武谷祐之は天保十四年(一八四三)に適塾に入塾している。適塾より帰藩した武谷椋亭の意見で創立された福岡藩の医学学校である賛生館が後の九州大学医学部の淵源となるのであるが、この武谷椋亭に対して緒方洪庵は安政四年(一八五七)十二月二十日附の手紙にこう記している。「久留米之松下君当秋より帰国いたし居候、同人は急度御役に相立候人物に御座候。何卒洋学之事に付御用之事も候はば同人へ御相談有之候而も可宜と奉存候」。

これを見ると緒方洪庵がいかに松下元芳を信頼していたかが窺える。

また、長与専斎の『松香私志』の中には次の如くある。

「余か入塾せる時の塾頭は伊藤慎藏(長州の人)とて越前大野藩の聘せられ、其次は栗原唯一(京師の人)とて水戸藩に雇はれぬ。其後は久留米の人松下元芳、中津の人福澤諭吉相踵きて塾頭となれり。松下は藩に歸りて後いく程もなく病歿し、伊藤・栗原の二人も今はなき人の數に入りぬ。ひとり福澤氏は其後東京に出て英學を修め、慶應義塾を開きて大に英才を養成し、文明の先導者として一代の敬崇する所となり、老益壯にして昔日の元氣に殊なることなし。」

松下元芳の一代後に福沢諭吉が塾頭となっている。福沢諭吉は「福翁自伝」の中の緒方の塾風の項で松下元芳との思い出話を次のように述べている。

「私と先輩の同窓生で久留米の松下元芳という医者と二人連れで、御霊という宮地に行つて夜見世の植木を冷やかしている中に、植木屋が『旦那さん、悪さをしてはいけません』と言つたのは、吾々の風体を見て万引をしたという意味だから、サア了簡しない。まるで弁天小僧みたいに捏繰り返した。『何でもこの野郎を打ち殺してしまえ』と私が怒鳴る。松下は慰めるような風をして『マア殺さぬでも宜いじゃないか』『ヤア、面倒だ。一打ちに打ち殺してしまふから止めなさんな』と、それこれするうちに従来の人々は黒山のように集まつて大混雑になつて来たから……」

松下と福沢は同胞のように仲が良かったと伝えられている。大阪の生活においては、勉学においても遊びにおいても

二人で過ごす時間が多かったようである。

安政三年（一八五六）秋に帰藩後の松下元芳は、同志と共に藩内に西洋医学の普及に努めるのである。工藤謙同に端を発した久留米藩の西洋医学は適塾門下生達の尽力と真木和泉守らの努力によって文久三年（一八六三）三月に久留米藩医学学校である「医学館」（のちの好生館）の設立となるのである。これが現在の久留米大学医学部の淵源である。

慶応年間に、藩政府の中心人物で進歩的な今井栄（明治二年殉難十志士）は、時勢を先見して藩に英語学校創立を建議した。藩は直ちに元芳に命じて、福沢諭吉の慶応義塾で英語を学ばせた。

諭吉は元芳を賓客として待遇し、自ら懇切に教授したので、数年たたぬ間に英学精通することができた。元芳は藩に請い英語学校創立にそなえて、多数の英学書を購入して帰藩した。

久留米藩奥医師の玉井忠田の日記によれば、慶応二年六月に松下元芳は藩主有馬頼咸の正室である精姫（將軍徳川家の養女、実是有栖川韶仁親王の王女韶子）のお付きの医師（奥詰医師）として江戸に行き、福沢諭吉のもとへ通っている。そして慶応四年三月二十二日の藩主夫人の江戸発、京都の実家行き迄勤めている。その後前出の日記によれば、慶応四年八月には御蔵米百五十石、父（初代元芳・元治二年没）の跡をうけ、奥医師として筑後久留米にいる記録がある。

しかるに藩勢一変、勤王攘夷党の水野政権樹立するに及び、

英語学校創立は退けられた。英語学校が立ち消えになった事を知った福沢諭吉は元芳に上京を促し、また長崎病院からの招聘もあったが、藩重役の反対で実現されなかった。

明治二年分限帳に「御医師奥詰録百五十石 両替町」とある。元芳は医学館で、蘭医学の原書で医生に講義し、西洋医学の普及に尽くしたが、希代の学識を活用させる場は得ることが出来なかった。久留米市民図書館に元芳の印鑑ある蘭医学二十冊と写本七冊が現存しているが、幕末ごろ蘭医学原書の一冊を入手すること甚だ困難な時代に、元芳がこの多くの原書を所有していたことから、その学識の深さが推察される。

辞世の詩

漢より出で蘭に入りまた英を学ぶ。

羞ず、吾れ強いて仕えて未だ名を成さず。

鏡に對し唾然として還りて一笑す。

鬢辺染出す雪千莖。

明治二年（一八六九）十二月九日没。

享年三九。

この松下元芳については私が日本医史学雑誌第四十四巻第三号（平成十年九月）「適塾の塾頭をした筑後久留米藩医松下元芳」資料として投稿致しました。

家系の中には、松下元芳の実弟で適塾に入門した松下済民、

又、松下元芳と同じく筑後久留米藩医中山元琳(松下元芳とはいとこ同士)らがいます。中山元琳は同じく奥詰医師で、明治三年から四年にかけて藩命により鹿児島医学校にいた英医ウィリアム・ウィリスの元に遊学しています。私はこの中山家の傍系に当たりますが、私の伯父中山弘道(元九大第一内科同門会長)は日本医史学会の名譽会員だった王丸勇先生(久留米大学精神科名誉教授)と九大大の同級生で親友でした。又、私の伯父鳥巢太郎(元九州帝国大学医学部第一外科助教授)は大東亜戦争中の九帝大米軍捕虜生体解剖事件に関与して、戦犯として巢鴨刑務所に服役しました。(当初の判決は絞首刑、後に減刑となる)鳥巢太郎家の次男鳥巢岳彦医師は九大卒業後、日本医史学会会員の小林晶先生の御指導を受けて、後に大分医科大学教授(整形外科)、大分医科大学長、大分大学医学部長を歴任しました。

これらの人々は同じ系図の中にありますが、一般の資料を投稿した際に、松下家の系図に関しては篠原正一著「久留米人物誌」から引用いたしました。篠原正一氏は福岡県立明善高校(旧筑後久留米藩の藩校が淵源)の国語・漢文の教諭をされておられた先生で、非常に正確な資料の本でありましたので、そのまま引用いたしました。そこには、松下元芳(二代)については『実は牛島養朴の子で、名は寿太郎。両替町の伯父松下養安(初代元芳)の養子となる。』と記されています。ところが郷土史家の古賀幸雄氏(NHKの歴史への招待にも出た方)から、松下元芳(二代)は松下養安(初代元

芳)の実子であると間違いを指導されましたので、修正した系図を報告いたします。

※篠原正一氏が何故間違った記述をしたかについては、元芳(二代)の叔父松下養朴が牛島家へ養子へ行き、牛島養朴となつている事、又、元芳(二代)の実弟済民も牛島家へ養子へ行っているが、この辺で混同されたのではないかという推測がなされる。

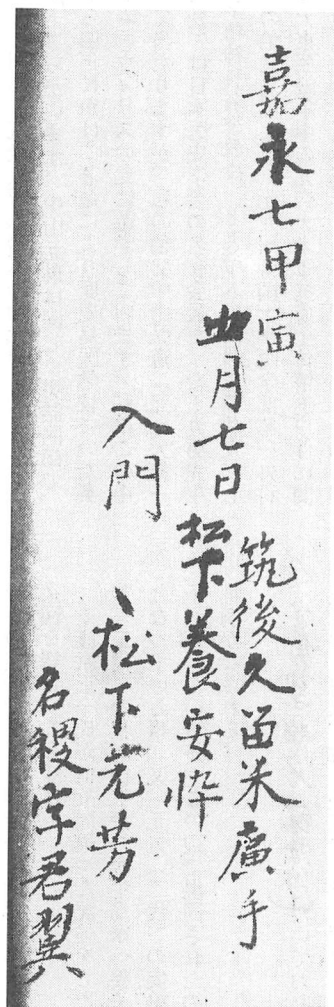
筆を置くに当り、ご指導いただいております元福岡大学教授井上忠様、郷土史家の古賀幸雄様、また写真を提供していただいた元神戸大学教授今津健治様に深く感謝いたします。

参考文献

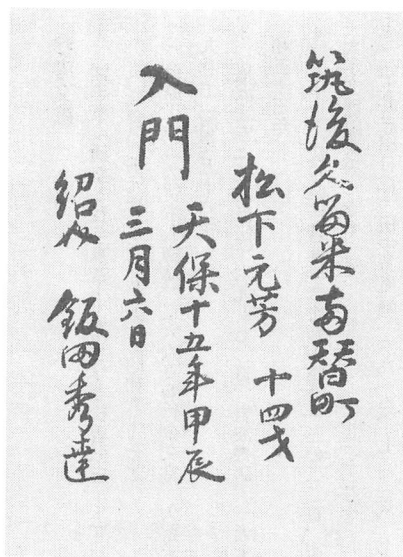
- (1) 伴忠康「適塾と長与専齋——衛生学と松香弘志——」一〇二頁
一〇三頁、創元社、一九八七年(昭和六十二年)
- (2) 篠原正一「久留米人物誌」三六六頁菊竹金文堂、久留米市、一九八一(昭和五十六年)
- (3) 福沢諭吉「福翁自伝」六九、七〇頁、岩波書店、一九七八(昭和五十二年)
- (4) 井上忠「武谷家所蔵蘭学者書翰の紹介」三の二二頁、西南学院大学文理論集第一巻第一号、一九六〇(昭和三十五年)
- (5) 「玉井忠田日記」田中芳胤編、六九二頁、七三二頁、七六七頁、七八九頁、玉井忠田顕彰会発行、一九八九年(平成元年)



筑後久留米藩医 松下元芳の写真



適塾入門時の直筆の署名
(適々斎塾姓名録より)



日田の広瀬淡窓の咸宜園
入門時直筆の署名

筑後久留米藩医
松下家・略系図と中山家の関係略系図

